

第 70 回日本生殖医学会学術講演会

2025.4.27-28

東京都

AP-011

初回凍結融解胚盤胞移植における孵化補助術 (AH) の臨床成績に与える影響

樽井千香子¹ 井谷裕紀¹ 小林亮太¹ 松本寛史¹ 水野里志¹ 上田匡¹ 福田愛作¹ 森本義晴²

¹IIVF 大阪クリニック

²HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

凍結融解操作により透明帯硬化は起こるとされ、日本では凍結融解胚の孵化促進を目的とし孵化補助術(AH)が広く用いられている。2022年4月から体外受精胚移植が保険適用となり当院では凍結融解胚移植全例に AH を実施していたが、その後の厚生労働省の適応症例の見直しにより現在は着床不全既往のある症例に限り実施している。しかしながら、凍結融解胚移植において AH を実施することで臨床成績が向上するかはよくわかっていない。そこで本研究では、初回単一凍結融解胚盤胞移植症例において AH が臨床成績に与える影響を検討した。

【方法】

保険で初回単一融解胚盤胞移植を 2022 年 9 月から 2024 年 8 月に実施した 621 周期を対象とし、AH 群：369 周期と非 AH 群：252 周期に分け、両群における患者背景、および臨床成績を比較した。

【結果】

AH 群 vs. 非 AH 群における胚移植時の患者平均年齢(34.2 ± 4.2 歳 vs. 33.9 ± 4.3 歳)と子宮内膜厚(11.2 ± 2.4 mm vs. 11.1 ± 2.0 mm)に差は無かった。AH 群 vs. 非 AH 群の臨床的妊娠率は、55.3%(204/369) vs. 60.7%(153/252)、流産率は 19.1%(39/204) vs. 13.1%(20/153)であった。また、移植時グレードが良好胚盤胞期胚(BB 以上)の臨床的妊娠率は 57.8%(200/346) vs. 62.2%(150/241)、流産率は 19.0%(38/200) vs. 13.3%(20/150)となり、両群間に差は認めなかった。

【考察】

初回凍結融解胚盤胞移植において AH の有無による臨床成績への有効性は認められなかった。したがって、初回の凍結融解胚移植症例に対して AH を実施する意義は少ないと考えられた。